プロレタリア通信 No.1
一九六六・十・十七
共産主義者同盟、書記局

10・21ベトナム・公務員秋斗の組織に向けて、日夜馬場学園にて奮斗している全国の同志諸君！

統一再建大会以来、労対・共闘部・学対・書記局の体制は、急速に固まりつつある。この体制は10・21斗争の実践的組織化をとおして、更に強固なものとなりつつある。

第一回及び第二回の政治局会議において決定した共闘体制の配置は、次のとおりである。

〈書記局〉 水沢・宮村・秋本・北田・佐々木・杉村
（解放派を除く）

〈共闘部〉 杉村・正木・紀山・笹原・味・美田・芦川・神山

〈共産主義〉 正木・杉村・飛鳥・内松・芦川・岩田・水沢

〈共闘部編集委員会〉＝〈共闘部〉＋〈書記局〉

〈労対〉 赤崎・秋本・佐々木・北田・仏・岡本・松本・松村・水沢

※労対の任務分担は次のとおりである。

・国鉄＝仏
・電通＝赤崎・佐々木・秋本・松本
・全逓＝北田
・教組＝秋本
・自治労＝秋本・松村
・商社＝松本・佐々木
・自動車＝北田
・東交＝仏・秋本
・全金＝仏・秋本

又、東京都の労対分担体制は次のとおりとする。

都委員会
- 中部 〃
- 西部 〃
- 北部 〃
- 南部 〃
- 三多摩 〃

神奈川県委員会 〃
千葉 〃 （準備中）

右の体制は、第一回六日に都労働者同盟員総会を開催して決定する。

現在確定している地方委員会は次のとおり。

・静岡県委員会
・愛知 〃 （三重・岐阜をくしあたり含む）
・関西地方委員会 ― 京都府委員会
　　〃 ― 大阪 〃
　　〃 ― 阪神地区 〃
・茨城県委員会（準備中）

〈学対〉 一向・藤井・河合・泉・三上・垂水・林・興見

※学対の任務分担は次のとおり

・学対責任者＝一向
　〃 副責任者＝藤井・総学対部長＝垂水
・社学同全国委員長＝垂水
　　副委員長＝林
　　書記長＝泉
・社学同部委員長＝泉
　　副委員長＝矢下
　　〃 〃 ＝前沢
　　〃 書記長＝野田
　　〃 書記局員＝武谷
・高対＝吉野

二、財政計画

党（同盟）活動にとって必要最低限度の経費は左のとおりである。

事務所	15,000
光熱費等	3,000
電話代	25,000
常行維持費	81,000
自動車（伝送費・燃料費）	10,000
新聞代	10,000
交通費（オルグ費）	10,000
合計	154,000

（尚、電話は、もう一台とりつける予定。）

我々は、これを基本的に同盟員を以て維持しなければならない。これを保障する同盟の体制は、次のようにならなければならない。

東京	10万	
東海	1万	
東関西	2万	
北海道	0.5	
計	13.5万	
不足額	2万	

不足額二万については、次のような形で解決することとしたい。

① 労働者細胞に於て、同盟費の再査定を行い、収入の五%を基準としつつ、事情の許す限り、同盟費をあげること。

② 尚かつ不足する場合には、都学生同盟員の街頭カンパにて補う。

③ これらの前提には、都の同盟員体制を維持することが、絶対条件となっている。このことの可否は、学生同盟員の規律にかかっている。

④ 今後、同盟員は、その月の一九日までに各細胞の責任者がまとめて、書記局に納入すること。

⑤ 九月分までの同盟費を納入していない同盟員は、今月出したらず清算すること、それについて各Gが責任を負うこと。

三、細胞会議の持ち方

細胞会議は、次の順序にて開催すること。

(1) 同盟費の納入状態の点検
(2) 「戦線」及び「共産主義」の拡大状況の点検と拡大方法の確認
(3) 同盟内文書「プロレタリア通信」等、及び「戦線」の検討
(4) 各細胞問題

このさいに、同盟員の点検、共闘組織の拡大状況の点検を第一に行う。眼をつけること。また、同盟全体の問題を検討したのちに、細胞自身の問題の検討に移ること。

尚、「共産主義八号」「戦線第七十六号」は、ともに爆発的売れ行きを示している。全国的にみては、共産主義の現金売上げ部数二一〇部、又、戦線は五〇〇部刷りと数部の。10・14斗争においては、三〇分内外のうちに、一〇〇部近く売れている。（ちなみに、「前進」の発行部数は、五〇六〇〇〇）

四、共産主義者同盟の動向と統一再建の意義

① 日共党本主流派の中共派除名と中共派の独自活動の開始
（「毛沢東思想研究」の発行）

② 日本の声と社学主流の11日新党に向けての政治路線テーゼの発表

③ 社重臨時都委員会（反対派）の指ド部解散（10月2日）

④ 社青同東京地本（解放派）に対する協会派のしめつけ強化

⑤ 共産主義左翼諸派内部に於ける我々の統一再建等、日本の左翼勢力全体が、流動を示めている。

この中における我々の統一再建は、ようやくにして、革命党を担う中心部隊が形成されつつあるという具体的イメージを身えつつある。

それだけではない。我々の統一再建は、共産主義左翼諸派内部における勢力配置を根底から変えつつある。

その第一の表現は、革共同中核派が、我々に対する防戦に転じていることであり、第二の表現は、解放派と我々の労働組合を基盤とした左翼系一戦線が、具体的日程にのぼってきたということである。

ⓐ 社青同解放派

の（詳細は、戦線第七六号「社青同東京地本問題――これの意味するものは何か」参照）

解放派の最近の特徴は、東京地評への接近を計っている点である。

解放派の基盤は、全国東京の青年部、東水青年部、東交青年部及び、新宿、目黒、太田、三多摩の地区にある。

彼等は、全国の拠点のロックの中でいくつかの支部青年部を握っており、又、東水、東交の青年部の中に部隊をもっている。

だが、今解放派は、たるむ状態におちいっており、暗中模索の状態にある。（10・17斗争における統一戦線の発言）その、

「模索」のひとつとして、東京地評の中にもぐりこもうとしている。これは、解放派の労働運動独立グループ化の道以外の何物でもない。

③10・21闘争直前にして、東京において、二つの重要な地区反戦が開催された。

南部反戦の集会（二〇〇名）と北部反戦の集会（〇〇名）である。

北部反戦（板橋・豊島・北・練馬・文京）の構成は、我々と中核と社青同（協会・構改・一部解放）であり、解放のウェイトは小さく、中核は、我々と中核との問題であった。この中で、路線・化学の戦場をバックとした我々の発言力は大きく全体をリードしたといえる。

これに対し、南部（目黒・太田・品川・港）反戦は、解放と我々と中核の三者の中で、解放がハケ口をもっている。

この両方の集会を通じて言えることは、いかに大衆を獲得するのかで、戦闘性を強めるのではなく、ベトナム問題とベトナム闘争の位置付け（重点）をめぐって、党派性が表われたということである。この場合、特に南部反戦においては、我々のベトナムの位置付け（①反戦世界体制全体が動揺しつつあること、②その動揺の中心軸は、第四主義諸国内部における反戦民主主義運動の動揺にあること、③ベトナムを中心とする後進国の動揺が、このような第四主義諸国内の動揺と重なり合いつつあるところに、ベトナムの国際的意義があること、④それゆえに、動揺を開始しつつある第四主義諸国の一環をなす日本自身の階級闘争をおしすすめることこそ、ベトナム人民への連帯であり、⑤日本プロレタリアートのスローガンは、「ベトナム反戦闘争を、反帝反政府闘争へ！」であること）は、全体をおさえ、解放派をとらえたといえる。

⑥解放派の存在している全体、要文においては、大合理化問題がおしよせつつある。

しかも、全体東京は、解放派をはじめ、中核、我々、旧ブント系独立グループ等、左派が結集しひしめき合っている。この全体において、我々が左派統一戦線を組織、我々の方針の下に諸党派を訪問していくという問題が、現実の目標にのぼっていると同時に、全体、東京の反合理化闘争をいかに介入し、いかに対抗的部隊を結集していくかは、今后の我々の中心問題のひとつである。（全体、東京の合理化闘争については、戦線七八号参照）

④ 革共同中核派

①ブント統一再建によって、最大の打撃をこうむり、反帝の対抗を問われているものこそ、中核派である。

中核全体を代表する論文二、岸本の「運動ブントの大会決議批判」（前進三〇五号）に、みることができる。

これの特徴は、

(イ) 我々の戦線及び、労働者階級を代表する岸本が批判の矢面にたったこと、

(ロ) その内容の特徴は、平時の岸本らしからぬヒステリカルな表現が強く、我々の政治報告の不満足部分に関する部分批判——あげ足取りに終始していること

(ハ) 我々の路線に対する体系的な批判になっていないということが特徴であるが、岸本が対置しようとしているのは、「世界革命の立場」「一国社会主義反対の立場」「プロレタリア国際主義の立場」という、いわば「原則」である。それは、旧ブントが、かつてかかげた強調なのであり、このような「労働者の原則的立場」は、今日の全体的な事態の矮小化となっているというべきであり、その原則の次元だけにとどまっているところに、同時に左翼革命派の限界もある）我々が、旧ブントの解体、長崎社研の敗北から、主体的総括として導き出したのは、プロレタリア世界革命を、いかにして実現するか、という「戦略、戦術」問題に、「世界革命の原則的立場」自体が、高められなければならないということであった。ところが、このようなプロレタリア・インターナショナル・世界革命への飛躍、戦術一辺倒、階級闘争を対象きの奪取であり、党を建設することのできる唯一の道であるということであった。

結局、中核岸本の批判は、十年前の次元からの批判——革命的左翼の問題を十年前の水準にひきもどすというたぐいの批判である。

(ホ) これに対しては、日本革命と世界革命をいかにして実現するか、という戦略・戦術の論争にひきずりこまなければならない。

② だが、このような岸本に代表される中核全体の公式見解とは別の「ウズ」がおこりつつあることに注目しなければならない。それは、学生中核派指導部の中の問題意義である。（マル学同第八回大会報告決定集第一報告、及び、前進三〇五号の「ブントの反戦闘争批判」（小野田）

マル学同大会の第一報告の特徴的内容は、

(イ) 二〇二年間、中核派が降参していることを認め、「その原因は何か」を追求しようとしている。

(ロ) その原因は、「黒田理論」の適用の仕方（＝組織戦術）にあったのではなく、黒田理論そのものに限界があった、としている。

(ハ) 黒田理論の限界は、「宮崎・社青同批判」において、顕在化した、とし、

(ニ) マル学同の死命は、「世界革命の性格と日帝の矛盾の展望についての再武装にかかっている」といっている。

又、前進の小野田のブント批判も、岸本のように、あげ足取り的批判というよりも、自らの直面している問題を打開しようとする苦闘がみられ、「戦略・戦術的問題」にひっぱられている。

このことは、学生中核派の中に、思想的原則の次元から、問題を発展させて、戦略・戦術問題に応えようとする傾向が生まれつつあることを示している。

(イ) 学生運動においては、我々と仮ちは、たえず接触しあっており、我々の内容が、下部の中に浸透していること。

(ロ) 学生運動の場合、革命的左派は、指導部の地位にいるのであり、戦術指導が最重要面から問題となっている、ニュアンスによって、我々の中核批判の方向は、思想的原則次元から、戦略・戦術的方向への傾斜をみせはじめている部分に対する介入＝その部分の問題意識を、戦略・戦術の枠に組み入れていくという方向でなければならない。

③ この場合、特に注意すべきことは、彼ら自身も「戦略的展望と戦術」という概念を使い始めているが、その意味（特に戦術の意味）が不明確であり、我々の介入は、その不明確さを明確にさせていくという方向をとらねばならないという点である。

(イ) 戦術とは、自らの地位を確認して、初めて言い得ることである。

自らの地位とは、抽象的な力量一般ではなく、敵戦指導部に対する自らの相対的地位であり、更に具体的に言えば、敵戦指導部に対する自らの相対的地位である。

(ロ) 社民が、指導部の地位にいるということは、彼等の「技術」、あるいは「資本のおこぼれ」等によって、なっているのではない。根本的には、大衆の持っている意識（組合主義、改良主義）の組織的表現である。このことは、プロレタリア大衆の意識を前提として、はじめて戦術がたてられることを意味する。

以上、(イ)(ロ)を考慮して言いうることは、戦術とは、統一戦線戦術以外にありえない、ということである。この点が、中核派には全くないのである。

又、彼らのプロレタリア国際主義については、次の点に注意すべきである。

(イ) 彼等は、世界革命＝一国革命とを、あれか二れか式に考えている。

だが、一国のプロレタリア革命は、世界革命の一環としてしかありえない。それは、資本の世界性にさまたげをもっている。

(ロ) この場合、問題となるのは、具体的一国革命をどう破口としてそれを戦略的に世界革命におしひろめるか（マルクスの永続革命・レーニンの世界革命）あるいは、いくつかの諸国のプロレタリアが、いっしょに手をつないで立ち上るという歴史的問題革命論か（中核派など）ということである。後者は、観念的世界革命論にほかならない。

(ハ) 日本プロレタリアートの「プロレタリア国際主義」は、プロレタリア日本革命の国際的任務——すなわち、世界革命の突破口となる、ということ以外にはありえない。「いっしょにやろうなど」という中核の国際主義はプチブル国際主義でしかない。

⑤ 「日本の声」・「社革」の統結集

統結集派は、「新しい内外情勢と共産主義運動の革新、統一——「政治組織方針案」を発表した。（日本の声・10月4日号）統結集主流の内容、志賀たちの原案に対する「反対派」の修正案がおって、その修正案が、政治組織方針案として公表されたのである。

現在、統結集内部には、志賀・鈴木・内野・内藤等の主流派に対して

(イ) 福田（現「こえ」労対部長）等の「こえ中堅グループ」

㋐ 大塚（全逓）、武内（地評）等、新たに総結集に加わる所
的運動家
㋑ いいだもも等のインテリグループ
㋒ 神山派
これら所謂、ゆるやかな反対派を形成している。この反対派の修正案がとうったのである。反対派はこのことによって意気をあげているのだが、志賀、内藤らの憤怒は、又者に何ぞや、せてもし到ち早く新党結成にもっていきたいということである。それは、日共の自主独立コースへの転換、それに判りの連共感覚とこの潮流の硬直化によって、こえば両面から圧迫を被むっているのであり、これへの甘い期待が余りもてない以上、結集問題に、こえ主義の発揮がかゝっているのである。
だが、社会党主流の停滞に対する政治的斜力としての日共の御墨、日前の総選挙での志賀の落選は、これら総結集内の反対派グループを独立化させる衝撃となるであろう。
このような情況が系諸派の党的結集への一貫した初撥と停滞へとなれば、三年間で会員のノ4への減少、その結果としての分裂化、碧立グループ化の最終的表現こそ、社革臨時都委員会（社革反対派）の最近の動向であるといっていい。

㋓ 社革内反対派
その間の初旬に、社革主流から都の指導権を奪って臨時都委員会をつくり、八月に左翼諸派を集めて反対派を公表したこのグループは、主流からも自も持つことができずに、十月二日に臨時都委員会を解散してしまったのである。
このグループは、都で数十名のグループである。
その上部は、旧学生運グループ（丸山、小塚）、西川、藤原＝労働運動家、中村文夫、片山さとし、野田弥三郎等によって構成されていたが「民主々義」だけでは、組織を維持することができず、もろくも崩れ去ったのである。
この結果、もはや個人・個人に分化しているといってよい。
ふりとどまって独自の道を追求するグループ（中村、小塚、西川、藤原等）
㋔ 総結集内反対派に期待をかける部分（丸山等）
㋕ 既存派部分
このような三つに分化しつくすであろう。
我々は㋔のグループに焦点をおき、最終的には、我々の組織への結集をかちとる必要がある。

㋖ 社学同ML派
旧ブントの流れをひき、なお残っている政治的独立グループが社学同ML派である。
全再建準備会結成大会には、
社学同三五。
中核　二八〇
解放　一二〇
ML派　六〇
以上の動員力であり、M.L派は、横国大（経、学芸）、東学大、お茶大内部等に影響力をもっている。
全再建準備大会においては、蒲池副委員長（同志社）に対して中核、解放派が敵意剥にも反対したのに対して、ML派は我々を支持したのである。
この点からいっても、我々はML派との接近を深めており、又ML派自体が本格的に問題を考え始めている点からいっても、ML派結集の条件は熟しつゝあるといっていい。
しかし、当面の党的結集の中心目標はML派であり、我々はこの方向に全力を注がなければならない。この成功は、学生運動における動力転換を決定的に変化させるであろう。

五、政治情勢の特徴と11～12月の基本方針
10・21のベトナムスト、及び数組・自治労の秋闘が闘われるかどうか。闘われる場合にはどのようなかたちで闘われるか。これによってそれ以降の情勢も強く左右されると考えなければならない。
現時点で言い得ることは、
㋑ 自民党の荒船、上林山・松浦問題によって自民党が政治的に動揺し、これによって政治的流動が激成されている。
㋺ 佐藤は、自民党体制の維持と党内ヘゲモニーの維持のために解散の時期設定に死活をかけている。これは12月ないしは1月に解散の時期設定をなすべきであるを得ず、この場合の自民党の四民結集綱領等という形にならざるを得ず、この場合の自民党の四民結集スローガンは学生編成を軸とした人総とした政策以外にない。
㋩ だが、行き詰りつつある現時点に於ては、自民党の結集力は手詰りに陥いりつつあり、これに対して社会党は中、収束の様を大々的にかかげつつある。
又総評はこの要求を利用して、「強行採決打倒、総評早期解散」のスローガンの下に動員キャンペーンを組織しようとしている。
（真はは公の政力改革）
又、現にの力の強調も、自民党内のプチブル的意識にとっては、また動員ムードにおりつつある。（10月闘争での渋谷の発言、10月一日の全国産業労働者集会）
このような情勢に対する我々の対応は10・21　の中心的課題である。
第一に、自民党の腐敗は単なる腐敗一般ではなく「現時点の階級的手詰り状態」、それに基く自民党からのプチブルジョア大衆の離反の開始、そこから来る自民党の行き詰り、その反映としての党内派閥闘争に集約があるしという階級的基礎をバクロしなければならない。（意伝）
第二に、総評が10～11・20の動員目標、11・27、闘争「ゼンガクレン」を組織してゆくのに対して、我々は「総評早期解散」のスローガンに対して「労働者人民の実力闘争で佐藤内閣打倒」のスローガンを対置しつつ介入しなければならない。
この様な事を通して、12月上旬に同盟主催の大衆的政治集会を開催し、圧倒的に成功させる必要がある。
東京の「二〇〇名の集会を軸としつつ関西・名古屋等にて大衆集会を開催し、全国集会として獲得される必要がある。（この点については政治局にて具体的に追って決定する。）

六、同盟の当面のスケジュール
十一月三日　中国地方総会
愛知県委員会
十一月六日　都労働者同盟員総会
十二月上旬　ひき続き大衆集会（都二二〇〇名目標）